論 文

前４千年紀後半期パレスティナ地域への文化流入
ーナイル河下流域系土器の分析からー

山藤 正敏

Cultural Influx toward Palestine in the Late Fourth Millennium B.C.:
An Analysis of Egyptian Pottery Found in Palestine

Masatoshi YAMAFUJI

前４千年紀後半期、すなわちパレスティナ地域におけるEB Ⅰ a/b 期には、多数の土器をはじめとするナイル河下流域に由来する遺物が数多く出土する。この遺物の解釈にあたって、多くの研究者により諸仮説が提示されてきた。しかしながら、これらの仮説は特定の遺跡や限定された地域から出土したナイル河下流域系遺物の分析に依拠しており、遺物の体系的かつ総合的な分析に基づいていない。そのため、本稿においては、パレスティナ地域内の複数遺跡から出土したナイル河下流域系土器に焦点を当て、ナイル河下流域系土器の出土割合・出土種類に従って、対象となる遺跡を５類型（遺跡類型 A/B/C/D/E）に区分した。この後、対象遺跡から出土した土器を一貫した分類基準に基づいて器形分類し、各遺跡類型間の器形数・種類を EB Ⅰ a/b 各期に関して検討した。この結果、EB Ⅰ a 期から EB Ⅰ b 期にかけて、遺跡類型間に量的及び質的差異を見出すことができ、パレスティナ地域－ナイル河下流域間の関係の構造に大きな変化が認められうることを把握できた。特に EB Ⅰ b 期における両地域間の関係に関して、近年の核－周縁モデルの適用に対して、より複雑な関係の構造の提示を試みた。

キーワード：パレスティナ前期青銅器時代Ⅰ期、ナイル河下流域系土器、器形組成、植民、核－周縁モデル

In the late fourth millennium B.C. (i.e. EB I a/b) large quantities of Egyptian pottery were found in Palestine. Interpretations of the relationship between Palestine and Egypt have been presented by many scholars in various ways, such as military conquest, trade, and colonization.

These interpretations, however, are inclined towards a dependence on the analyses of Egyptian materials recovered from only one site or a limited area. Few systematic and synthetic analyses of Egyptian materials found in Palestine have been carried out so far.

This paper attempts to analyze Egyptian pottery in Palestine systematically and synthetically, in order to examine the plausibility of interpretations about the relationships. First, the main sites in Palestine are categorized into five patterns (Site categories A/B/C/D/E) with particular reference to the inclusion of imported pottery from Egypt or locally-made, and their quantity among the assemblage. Second, all the pottery reported from the sites mentioned are re-classified, and the existing forms of Egyptian and Palestine pottery are examined, according to site categories.

It is concluded that quantitative and qualitative differences between site categories are recognized and therefore it is suggested that structural changes of the relationship might occur between EB I a to EB I b. A reexamination of the application of a core-periphery model to the relationships in EB I b especially, suggests that the structures of the relations had been more complicated in EB I b.

Key-words: Early Bronze I a/b in Palestine, Egyptian pottery, form variations, Colonization, core-periphery model

はじめに

紀元前４千年紀後半期、すなわち前期青銅器時代Ⅰ a/b 期（以下、EB Ⅰ a/b 期と記述）のパレスティナ地域[1]において、ナイル河下流域[2]系の遺物がその前後の時期に比して極めて多量かつ頻繁に出土するという現象が以前より知られている。この現象は、過去半世紀の間、さまざまな形で議論され、諸仮説が提唱されてきた。近年では、当該時期・地域への世界システム論の適用が試みられ、両地域

西アジア考古学　第８号　2007 年　67-86 頁
Ⓒ 日本西アジア考古学会

関係を核－周縁モデル（Core-periphery model）により全体的に把握する試みがなされている（Levy and van den Brink 2002）。

しかしながら、上の仮説は、定量的・体系的な分析による考古学的あるいは文献学・図像学的証拠に必ずしも裏打ちされているわけではない。寧ろ、ある特定の特徴的遺物の出土事例が組み合わされることによって構成されている。したがって、両地域関係に関してより精緻な議論を進めていくには、資料の定量的・体系的な分析、さらに、複数遺跡からの出土資料を取り扱う総体的な分析の結果を加える必要がある。この場合、多数出土しているナイル河下流域系土器を対象として分析を行うことが最も適切であると考える。

ナイル河下流域系土器は、他のナイル河下流域系の遺物に比して圧倒的多数が出土しており、加えて 1980 年代後半に行われた胎土分析の結果（Porat 1986/87, 1989）によりその重要性がますます高まったにもかかわらず、各遺跡を統合する包括的な編年枠が用意されていなかったこと等から、複数遺跡を対象とした体系的・定量的な分析がほとんどなされてこなかった。また、他の遺物と異なり、遺跡において出土したナイル河下流域系の遺物の中にほぼ必ず含まれ、比較的普遍的な存在であることから、遺跡間の比較を行い易いという利点を有している。

本稿では、EB Ⅰ a/b 期におけるパレスティナ地域とナイル河下流域の関係を把握しなおすために、パレスティナ地域出土のナイル河下流域系土器及びそれに伴うパレスティナ地域在地系の土器を分析対象資料として使用し、その器形に焦点を当てて、定量的かつ体系的な分析、及び複数遺跡からの出土土器資料を対象とする総体的な分析を行う。器形については、従来簡略に言及されているのみであり、また、日常活動を少なからず反映していると捉えられる器形ヴァリエイションの分析により、各遺跡におけるナイル河下流域系文化の浸透度を明瞭にできるのではないかと考えたからである。ただし、報告資料を利用した分析であるため、ここで示す各遺跡の器形ヴァリエイションが実際の出土資料の器形ヴァリエイションよりも少ない可能性を否めないことを断っておく。

上の分析結果に基づいて、近年の仮説の骨格となっており、また、後述するような問題を内包している世界システム論（核－周縁モデル）の適用のあり方について再検討し、パレスティナ地域とナイル河下流域との間に成り立ちうる関係を新たに提示することを試みる。

パレスティナ地域－ナイル河下流域関係研究史

EB Ⅰ a/b 期のパレスティナ地域と、この時期に並行する中・後期先王朝期、原王朝期および第１王朝最初期（Adams and Ciałowicz 1997 に拠る）のナイル河下流域との関係については現在に至るまで多種多様な仮説が提示され、研究史を煩雑なものにしてきた（表 1）。しかし、各々の解釈の方向性に従って、これらの仮説を以下の５つの類型に分類することができる。すなわち、1）第１王朝エジプトによるパレスティナ地域の軍事的侵略・征服説、2）両地域間の交易説、3）ナイル河下流域住人による交易を目的としたパレスティナ地域への植民・移住説、4）3）の植民・移住説を通時的に展開したもの、及び 5）両地域間関係を理論的枠組みの演繹（モデルの適用）により説明しようとするもの、である。なお、1）から 3）に分類される諸仮説では、対象時期が EB Ⅰ b 期のみとされている場合がほとんどである。

表１　パレスティナ－ナイル河下流域交差編年

絶対年代	ナカダ編年	パレスティナ地域南部（主要遺跡層序）	パレスティナ編年
3100B.C.	Naqada IIIb1-c1	テル・ハリフ・テラス（Silo Site）第Ⅱ A-B層 テル・エラニ（旧）第Ⅴ層 エン・ペソル　第Ⅲ層	EB I b (Late)
	Naqada IIIa2-b1	テル・ロッド　第Ⅳa層	EB I b (Middle)
3300B.C.	Naqada IIIa2	テル・エラニ（新）第C層	
	Naqada IId2		EB I b (Early)
	Naqada IIc-d1	テル・エラニ（新）第D層	
3650B.C.	Naqada IIa-b	ラキシュ（北西集落）サイトH	EB I a
		タウル・イクベイネ第Ⅲ・Ⅳ層	

（Levy and van den Brink 2002に基づく）

1．軍事的侵略・征服説

研究初期には、軍事的侵略・征服説と交易説の間で論争が繰り広げられた。Y. ヤディン（Yadin）は、ナイル河下流域南部のヒエラコンポリス遺跡から出土したナルメル王の戦勝パレットを図像学的に解釈し、裏面下段に描かれた凧状遺構に類似したシンボルと捕虜のアジア人風の容貌から、ナルメル王によるパレスティナ地域への侵略が行われたとする仮説を提示した（Yadin 1955）。これに追従する形で、S. イェイヴィン（Yeivin）は、ナイル河下流域系土器がテル・エラニ遺跡（Tel ‘Erani）第Ⅴ層中に突然出現することを根拠に、エジプト第１王朝による軍事的侵略と征服が行われたと結論づけた（Yeivin 1960, 1968）。

2．交易説

１の仮説に対して、W. A. ウォード（Ward）は両地域間の関係はあくまでも交易関係であったとし、ヤディンやイェイヴィンの説に対して異議を唱えた（Ward 1963, 1968）。R. アミラン（Amiran）もまた、軍事侵略・征服説を批判し、エジプト王家から委託された商人による交易が行われていたと論じている[3]。以上の１とこの仮説の論争は、いずれも同一の出土資料に依拠しているため、解釈の水掛け論的印象を免れないものである。

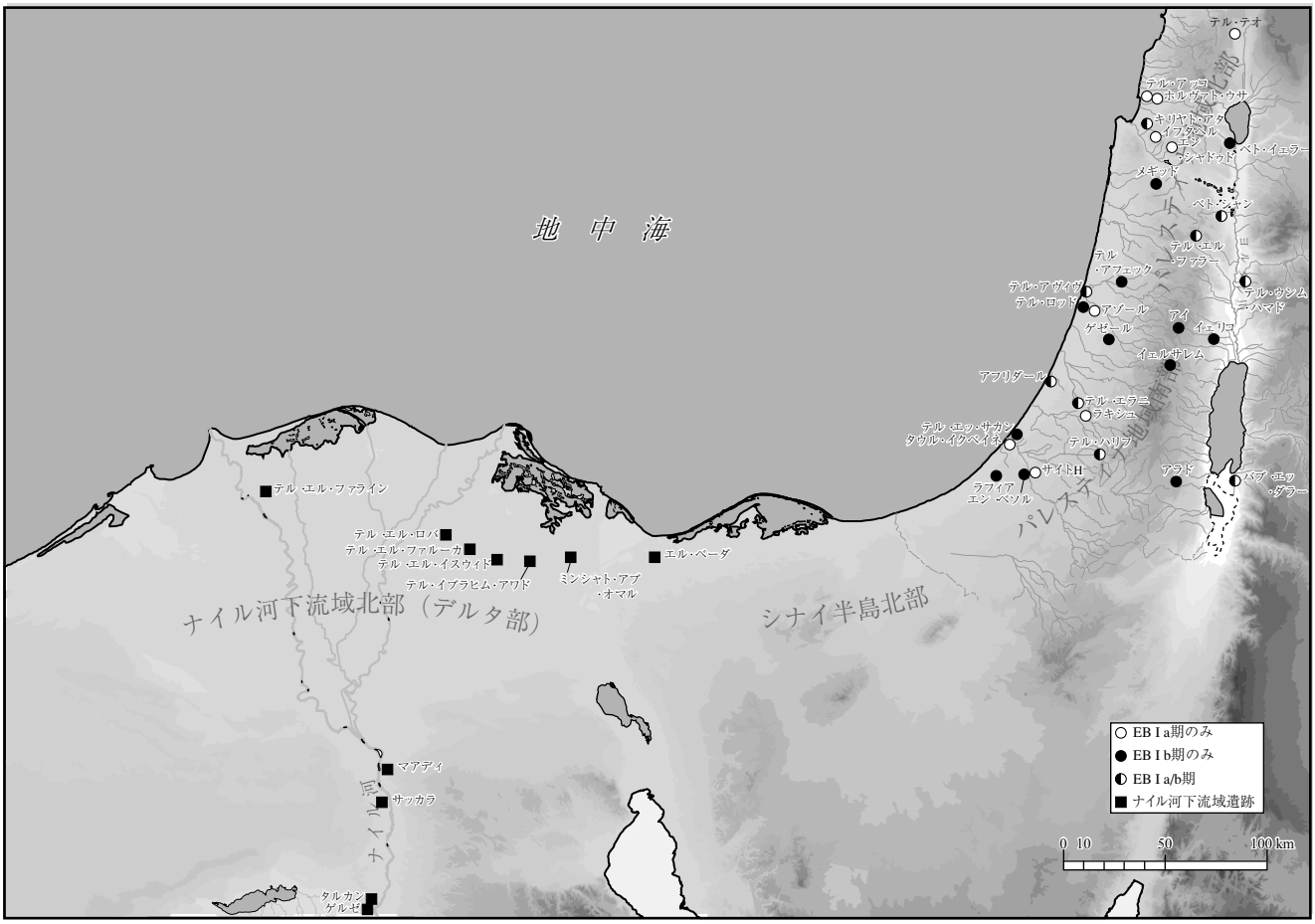


図１　EB Ⅰ期パレスティナ地域－ナイル河下流域主要遺跡分布図

3. 交易を目的とした植民・移住説

１と２の間の論争が終わる頃、ナイル河下流域からパレスティナ地域への植民・移住が提唱され始める。R. ゴフナ（Gophna）は、パレスティナ地域南部から出土したナイル河下流域系土器の中で調理用と考えられる器形の比率が高いことを指摘し、ナイル河下流域からパレスティナ地域への人間集団の移住の可能性に言及した（Gophna 1976a, 1976b）。彼は、パレスティナ地域南部に位置するエン・ベソル遺跡（'En Besor）を根拠地として、第１王朝エジプトによる現地の経済的搾取が行われていたと想定した。この植民・移住に着目する流れは、資料の増加とあいまって、1980 年代には次第に主流となったが、第１王朝エジプトによるパレスティナ地域の支配を想定しない立場をとる植民・移住説に徐々に移行していった。A. ベントール（Ben-Tor）は、ナイル河下流域とパレスティナ地域の商人たちの相互の往来と、両地域の商人の相互の地域への移住を想定し（Ben-Tor 1986: 15）、パレスティナ地域において両地域の人間集団が隣接して生活していたことに言及するに至っている（Ben-Tor 1991: 8）。他に、テル・エラニ遺跡出土資料から考察を行った B. ブランドル（Brandl）（Brandl 1989, 1992）、シナイ半島北部に焦点を当てた E. D. オーレン（Oren）（Oren 1973, 1989）、また、ナイル河下流域の人間集団による植民活動の商業的性格について述べたウォードの新しい論考（Ward 1991）を植民・移住説のカテゴリーに属する主な論考として挙げることができよう。

4. 植民・移住説の通時的展開

1990 年代初頭には出土遺物の科学分析や比較分析の事例が増加し、ナイル河下流域－パレスティナ地域間関係を銅石器時代から EB Ⅰ b 期に至るまで通時的に把握しようとする傾向が見られるようになる。

ゴフナは 1996 年に再び自説を展開するが、ここでは、1970 年代に彼が扱った時期より少しさかのぼる EB Ⅰ最初期（＝ EB Ⅰ a 期）を対象としている。彼は、両地域間の商業上の取引を背景としたナイル河下流域北部の人間集団によるパレスティナ地域南部への移住を想定した。この論文は、EB Ⅰ b 期を対象とした上述の論考（Gophna 1976a/b）と合わせて、パレスティナ地域－ナイル河下流域間関係を通時的に理解しようとする傾向の一翼を担っている。また、P. de ミロシェジ（Miroschedji）は後期銅石

器時代～ EB Ⅳ期（ナイル河下流域 Naqada Ⅰ期～第６王朝・第１中間期）を７段階に区分し、パレスティナ地域－シナイ半島北部－ナイル河下流域の関係の変化を通時的に示した（Miroschedji 1998, 2002）。加えて、彼が示した関係の通時的変遷の背景には、当該関係への核－周縁モデルの適用が見え隠れしていることは重要である。

5. 核－周縁モデルの適用による解釈

解釈モデルを適用する傾向は、1990 年代後半から顕在化してきた（Levy et al. 1997: 2-3, 6-7）。

近年では、T. E. レヴィ（Levy）と E. C. M. ヴァン・デン・ブリンク（van den Brink）は、テル・ハリフ・テラス遺跡（Tel Halif Terrace）のサイロ地区（Silo Site）を対象とした通時的な事例研究を通して、銅石器時代以降に非対称な力関係へと移行した、パレスティナ地域とナイル河下流域（あるいは第１王朝エジプト）の社会関係に対して核－周縁モデルを適用している（Levy and van den Brink 2002: 4-6）。結論として、テル・ハリフ・テラス遺跡サイロ地区の第Ⅱ A/B 層におけるナイル河下流域系遺物の急激な出現とセレク（王名枠）が刻まれた遺物の出土から、ナルメル王の下での第１王朝エジプトによる政治的・行政的関与（交易関係の厳格な統制）を想定する、ナイル河下流域（Core）－パレスティナ地域（Periphery）間の非対称的な長距離交易関係を示している（Levy and van den Brink 2002: 25-29）。なお、上述のミロシェジもまた、EB Ⅰ b 期におけるナイル河下流域（エジプト）とパレスティナ地域の関係に対して、非対称的な核－周縁モデルを適用し、前者の後者に対する優位及び支配的地位を認めている（Miroschedji 2002: 47-48, 51-52）。

さらに、A. ペレス－ラルガチャ（Perez-Largacha）は Naqada Ⅰ～Ⅲ期に至るまでの両地域間関係を通時的に検討しており（Perez-Largacha 1995）、ナイル河下流域の人間集団の移動を伴う交易関係を想定し、第１王朝エジプトの行政体としての関与については肯定的な姿勢をとる。また、この関係には、遅くとも Naqada Ⅱ期以降では、力関係の非対称性を想定する核－周縁モデルが意識されていると思われ、ナイル河下流域（エジプト）を１次的国家（Primary State）、パレスティナ地域を２次的国家（Secondary State）とし、前者の後者に対する優位とほぼ一方的な影響を示唆している。

なお、以上のような非対称な関係が論じられた背景として、ナイル河下流域における調査・研究の進展に言及する必要がある。例えば、1988 ～ 1991 年まで３期にわたる調査の行われたウンム・エル・カアブ遺跡（Umm el-Qaab）U-j 墓からは、ワインが納められたと考えられるパレスティナ地域系土器が約 400 点出土している（Dreyer 1998）。U-j 墓は、Naqada Ⅲ a2 期に位置づけられる王朝成立以前の支配者の墓とされ、当該期において最大級の規模（9.10 × 7.30 × 1.55（m））を誇る（Dreyer 1992: 295-296, 1998）。この墓の出現直後の時期について、パレスティナ地域から出土する印影等を念頭に置き、エジプトの行政体により交易の統制が行われていたことが示唆される（Hartung 1994: 111, 2002: 448 etc.）。この統制された交易活動という解釈は、ナイル河下流域のような支配者の存在が認められない同時期のパレスティナ地域に対して、ナイル河下流域が政治・経済的に優位であった印象を伴う。このような状況が、両地域間関係を核－周縁モデルの枠組みにより理解する契機を与えていると言うことができる。

ナイル河下流域土器について

1950 年代より徐々に認識され始めた当該期パレスティナ地域におけるナイル河下流域系物質文化は、その後の資料の蓄積に基づいて、1980 年代後半には化学的な分析の対象とされるにいたった。

N. ポラート（Porat）により行われた胎土分析（記載岩石学的分析）[4] により、従来形態や素地の視覚的印象に基づいて判別されてきたナイル河下流域系土器が化学的に判別されることとなった（Porat 1986/87, 1989, 1992）。対象となった資料はパレスティナ地域南部の主要な遺跡の出土資料からサンプリングされたものであるため、分析による類型化の妥当性は相対的に高いと言える[5]。この分析の結果が重要である所以は、これまで一括してナイル河下流域系とされてきた土器の中に、少なくとも２種類の土器が含まれることが認識されたことにある。ポラートはパレスティナ地域出土土器を以下の３類型に分類した（Porat 1986/87, 1989）。

1）グループ１（＝ナイル河下流域系在地産土器）

このグループの粘土はシルト質のレス堆積物に由来し、パレスティナ地域南部において堆積が認められる。

2）グループ２／３（＝ナイル河下流域系搬入土器）

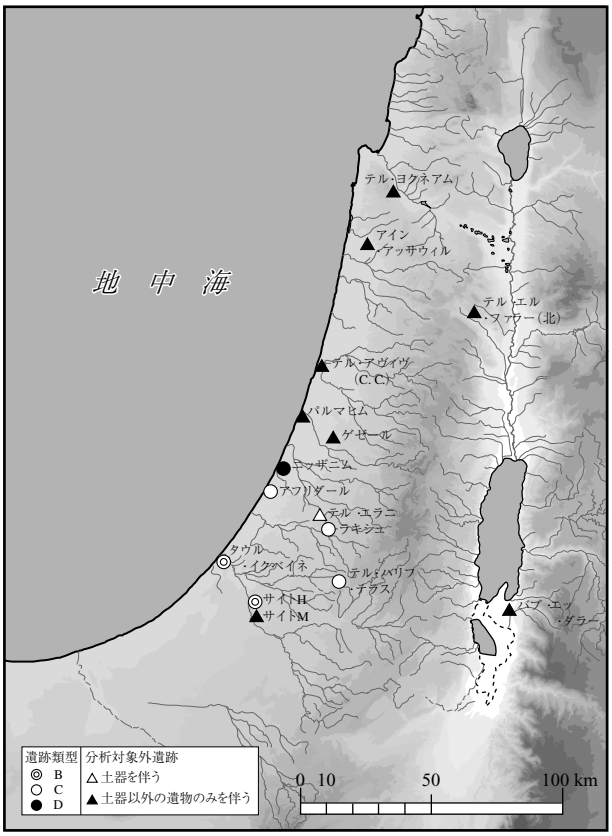
分析では、前者はナイル・シルト製、後者はマール・クレイ製として、両者は区別される（Porat 1989: 52-54）。

3）グループ４（＝パレスティナ地域系土器）

上記のとおり、ナイル河下流域系土器には搬入品と在地製作品の２種類が存在するということが明らかにされた。ナイル河下流域在地産土器はパレスティナ地域で採取されたレス起源のシルト質土壌を利用し、混和物として植物遺存体が認められたという。この混和物は、ナイル河下流域系搬入土器において認められたものと類似しており、同じ製作技法の適用が示唆される。

本稿では、上記の分類結果に従い、パレスティナ地域出土土器を３つの土器類型、すなわち、ナイル河下流域搬入土器、ナイル河下流域在地産土器、及びパレスティナ地域

EB I a



EB I b

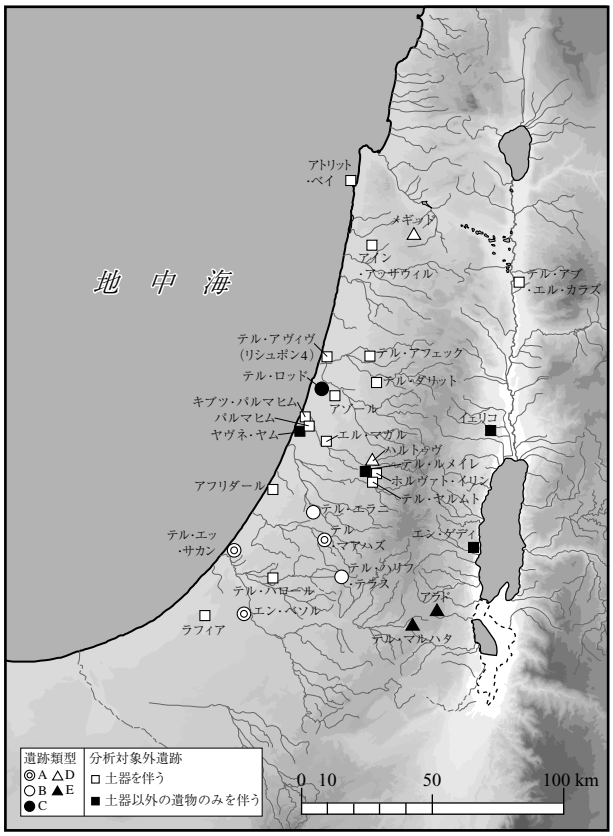


図２　EB Ⅰ期パレスティナ地域におけるナイル河下流域系遺物出土遺跡分布

表２　分析対象遺跡データ

遺跡	調査地区	遺跡面積（㎡）	調査面積（㎡）	座標(Israel Map Ref.)	形態	時期	層序	遺跡類型
Taur Ikhbeineh	全体	7-800(5000)	-	0944/0960	開地	EB I a	-	B
	Site A	250	50	0944/0961			III-IV	
	Site B	ca. 500	-	0944/0962			III-IV	
Site H	-	40000	-	1015/0800	開地	EB I a	不明	B
Lachish	Area 1500	-	-	1357/1083	洞穴	EB I a	-	C
Tel 'Erani	全体	252925 (High Terrace)	-	1290/1130	テル（テラス）	EB I a/b	-	C/B
	Area D Ⅱ	-	ca.200	1290/1130			D/C	
	Area D	-	-				XII-V	
Afridar	Area E	-	-	1070/1190 (Ashkelon)	開地	EB I a	不明	C
Nizzanim	-	10000	80	1136/1283	開地	EB I a	IV	D
En Besor	-	ca.1500	400	1013/0795	開地	EB I b	III	A
Tell es-Sakan	-	8-90000	1400	-	テル	EB I b	A6-9	A
Tel Ma'ahaz	-	ca.5000	3トレンチのみ	1314/1028	開地	EB I b	I	A
Tel Halif Terrace	Site 101	-	100	1374(3)/0879	テルテラス	EB I a/b	IV-II	C/B
	Silo Site	-	>1300	1376/0878	テルテラス	EB I b	II	B
Tel Lod	-	20000	150	1407.68/1517.82 1408.15/1517.85	開地	EB I b	IVa	C
Megiddo	Area J	ca.27000	-	1675/2212	テル	EB I b	J-4a/b	D
Hartuv	Area A/B	30000	335	1502-1501/1304-1307	開地	EB I b	II	D
Arad	-	ca.200000	-	1620/0750	テル	EB I b	IV	E
Tel Malhata	全体	8000	ca.2000	1523/0697	テル	EB I b	V-III	E
	Area C	-	-		テル	EB I b		

系土器に区分して以下の分析・考察を行う。

対象遺跡の類型区分

本稿の分析において対象とする遺跡は、EB Ⅰ a 期に属するものが7遺跡、EB Ⅰ b 期に属するものが11遺跡であり、多くが海岸平野あるいは近隣の地域に位置している(図2; 表2)。これらの遺跡からは住居と考えられる石積み遺構が検出されるため、居住遺跡であると判断されている。遺跡の規模に関して格差が大きいものの、パレスティナ地域系土器に伴ってナイル河下流域系土器が出土するという点で共通性を有している。分析にあたっては、ナイル河下流域系土器の出土のパターン、すなわち、搬入土器・在地産土器の出土の組み合わせ及び全出土土器中に占める割合にしたがって、これらの遺跡をAからEの5遺跡類型に分類する[6]。各遺跡類型の分類基準に関しては、以下に示すとおりである。遺跡類型Aは、ナイル河下流域系搬入・在地産土器両者を伴い、その割合が全体の80%以上を占める。遺跡類型Bは、ナイル河下流域系搬入・在地産土器両者を伴い、その割合が全体の50～10%を占める。遺跡類型Cはナイル河下流域系搬入・在地産土器を伴い、その割合が全体の10%未満を占める。遺跡類型Dはナイル河下流域系在地産土器のみを伴い、その割合が全体の10%未満を占める。最後に、遺跡類型Eは、ナイル河下流域系搬入土器のみを伴い、その割合が全体の10%未満を占める。なお、ナイル河下流域系搬入・在地産土器両者を伴い、その割合が全体の79～51%を占める遺跡は認められなかった。

以上の5遺跡類型の内、EB Ⅰ a 期の対象遺跡に関しては遺跡類型B～Dのみが、また、EB Ⅰ b 期の対象遺跡に関しては全ての遺跡類型が認められた。

土器の器形分類

上の遺跡分類と共に、パレスティナ地域系土器とナイル河下流域系土器を一括して、器形分類を行った。まず、輸送・貯蔵・調理用器と日用雑器というおおよその機能的区別を想定して、器形を壺類と鉢類に大別した。また、各類内での細別を行い、壺類を、短頸壺・長頸壺・無頸壺・小形壺の4細別器形に、鉢類を、直線口縁鉢・内彎状鉢・外反口縁鉢・内彎状浅鉢・内彎状深鉢・円筒形容器・ブレッドモールドの7細別器形に分類した。さらに、これらの各細別器形を、口径の大きさ、肩部の角度(計測方法はHolthoer 1977参照)、器壁の角度、把手の有無等に基づいて再細別し、以下のように、壺類を26器形、鉢類を23器形に分類した。

＜壺類＞(図3: 1-43)

・短頸壺(図3: 1-10)

口径に対する頸部高の割合が30%未満の器形である。口径のサイズから極大・大・中・小の4細別、口縁部から頸部への形状から直立・内傾形と外反・外傾形の2細別が認められ、計8細別器形に分類した。

・長頸壺(図3: 11-18)

口径に対する頸部高の割合が30%以上の器形である。以下の5細別器形に分類した。なお、各細別器形とも確認数が少なかったため、サイズ分類を行っていない。

1) 細口長頸壺(図3: 11-13)

頸径及び口径が相対的に小さく、頸部が比較的長いと考えられる器形である。

2) 広口長頸壺(図3: 15, 16)

細頸壺よりも頸径が大きくほとんどくびれていない器形である。

3) フラスコ形壺(図3: 14)

欠損資料が多いが、おそらく頸部が長いと考えられる器形で、胴部が球形、肩部に突起状環状把手を1対有する。EB Ⅰ b 期においてのみ認められる。

4) 広口長頸長胴壺(図3: 17)

垂直に立ちあがる頸部を有し、口径に対する頸部高の割合が30%以上を占める。EB Ⅰ a 期においてのみ認められる。

5) 狭口長頸長胴壺(図3: 18)

相対的に長頸を有し、肩部から口縁にかけて狭まる。器壁が極めて分厚い。EB Ⅰ b 期において2点のみ認められる。

・小形壺(図3: 19-29)

当該期のパレスティナ地域及びナイル河下流域において普遍的に認められる小形の袋状の壺である。サイズ分類は行われない。

1) 長球状(図3: 19-21)

底部が丸底であり、全体的にやや長球状である。

2) 球状(図3: 22-25)

底部が丸底である場合が多く、全体的に球状である。口縁部が狭まるものと広がるもの、有頸のものと無頸のものが含まれる。

3) 環状把手付(図3: 26)

口縁部先端から肩部にかけて1つの環状把手を有し、胴部が球状である。EB Ⅰ b 期においてのみ認められる。

4) フラスコ状(図3: 27)

頸部が急激に狭まり、肩部に突起状把手を1対有し、胴部が球状である。EB Ⅰ b 期においてのみ認められる。

5) 注口付(図3: 28)

肩部に注口あるいは擬注口を有し、胴部は長球状である。EB Ⅰ b 期においてのみ認められる。

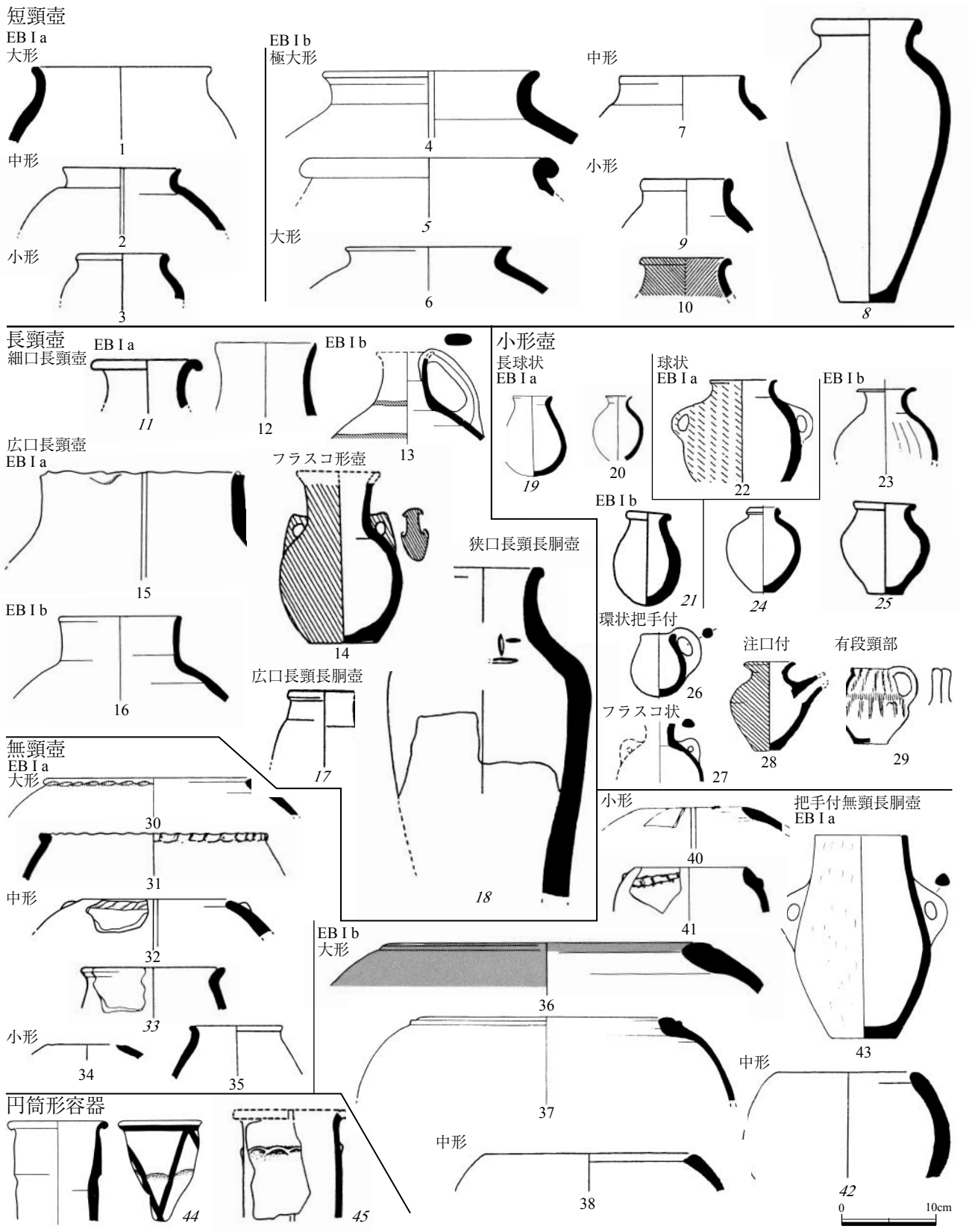


図３　EB Ⅰ期出土土器＜壺・鉢類＞（斜字体はナイル河下流域系）

（EB Ⅰ a 期 - タウル･イクベイネ: 2, 3, 11, 17, 31; サイト H: 1, 19, 33, 35, 43; テル･ハリフ･テラス（101）: 12, 20, 22, 34; ラキシュ: 29; アフリダール: 15, 32; ニッザニム: 30）

（EB Ⅰ b 期 - エン･ベソル: 5, 9; テル･エッ･サカン: 24; テル･マアハズ: 18, 40; テル･エラニ: 8, 14, 21, 25, 28, 45; テル･ハリフ･テラス（Silo）: 4, 23; テル･ハリフ･テラス（101）: 38, 42; テル･ロッド: 37; メギッド: 36; ハルトゥヴ: 10, 26; アラド: 6, 7, 13, 16, 27, 41, 44）

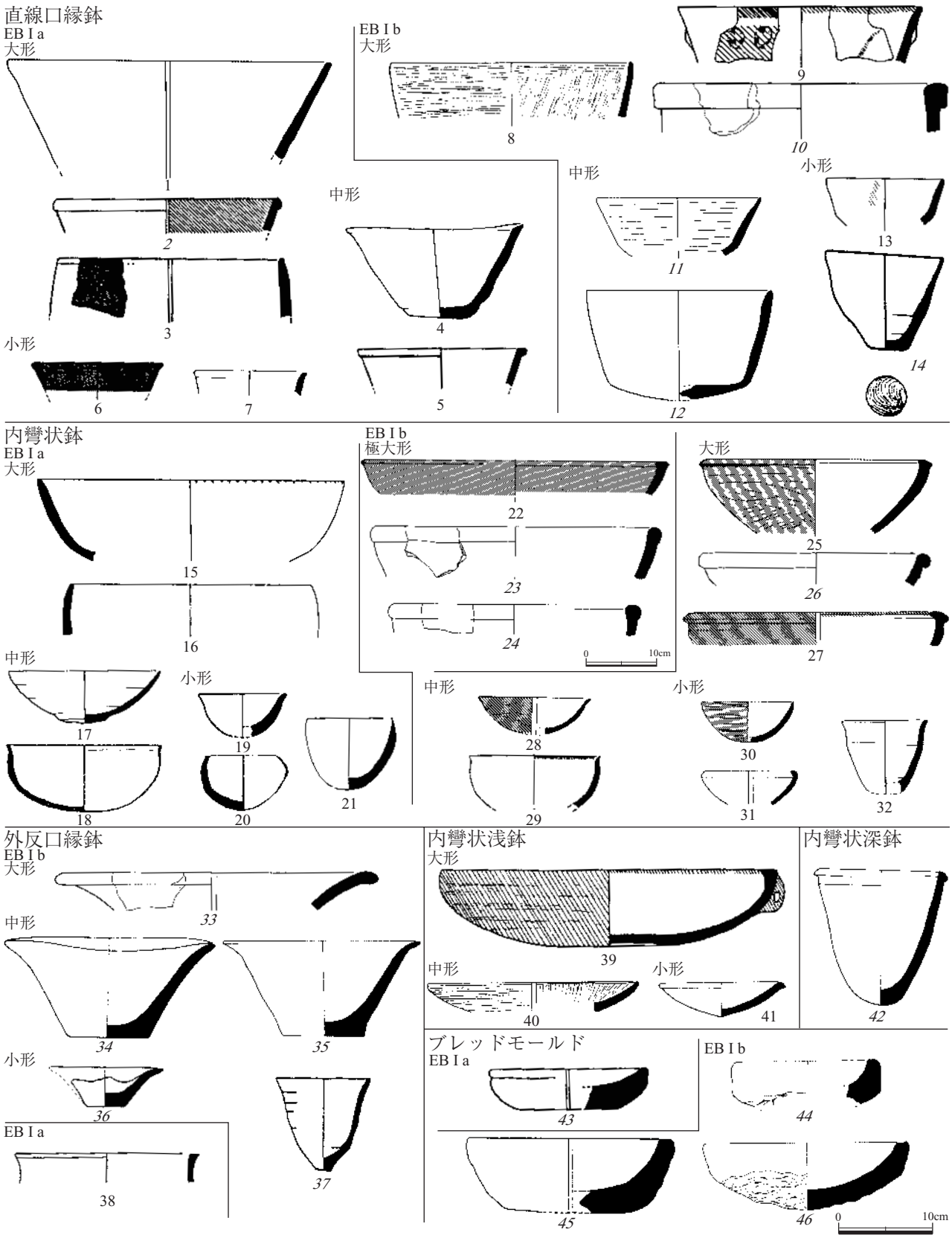


図４　EB Ⅰ期出土土器＜鉢類＞（斜字体はナイル河下流域系）

（EB Ⅰ a 期 - タウル･イクベイネ: 2, 3, 5, 6, 43; サイト H: 15, 16, 19; テル･ハリフ･テラス（101）: 7, 21, 38; ラキシュ: 18, 20; アフリダール: 1,4,17）

（EB Ⅰ b 期 - エン･ベソル: 8, 10-12, 23, 24, 33, 466; テル･マアハズ: 34, 36; テル･エラニ: 9, 14, 32, 37, 39, 45; テル･ハリフ･テラス（Silo）: 27,31,40; テル･ハリフ･テラス（101）: 26;テル･ロッド: 28, 44; メギッド: 25, 30, 35, 41, 42; ハルトゥヴ: 29; アラド: 13, 22）

6）有段頸部（図 3: 29）

頸部の形態が凸形、胴部が球状であり、平底を有する。EB Ⅰ a 期において2点のみ認められる。

・無頸壺（図 3: 30-42）

口径のサイズから大・中・小形の3細別、口縁部から肩部の角度が緩やかなもの（50°以上）と急なもの（50°未満）の2細別が認められ、計6細別器形に分類した。また、その他の器形として、肩部に環状把手を1対有する把手付無頸長胴壺もある。この器形は EB Ⅰ a 期においてのみ認められる（図 3: 43）。

＜鉢類＞（図 3: 44, 45 ; 図 4）

・直線口縁鉢（図 4: 1-14）

体部から口縁部にかけての立ち上がりが直線状である。口径の差異により、大・中・小形に3細別、また、体部の立ち上がりに関して、緩やかなもの・急なもの・直立するものという3細別が可能である。立ち上がりが直立するものは大形のみに認められるため、したがって、計7細別器形に分類できた。なお、EB Ⅰ a 期では、中形で体部の立ち上がりが急なものが存在しないため、全6細別器形のみが認められる。

・内彎状鉢（図 4: 15-32）

体部の立ち上がりが内彎している。口径の差異により、極大（EB Ⅰ b 期のみ）・大・中・小形に4細別、体部の立ち上がりに関して、外傾・内彎に2細別、また、小形については浅鉢と深鉢の2細別（EB Ⅰ a 期のみ）が可能である。極大形では体部の立ち上がりによる細別を行わないため、計8細別器形に分類可能である。

・外反口縁鉢（図 4: 33-38）

体部から口縁部の立ち上がりが外反している。口径より、大・中・小形の3細別器形に分類した。なお、EB Ⅰ a 期では点数が少ないため、細別を行っていない。

・内彎状浅鉢（図 4: 39-41）

上記の直線口縁鉢と内彎状鉢のうち、数値的に明らかに浅いものを抽出し、本器形を設定した。体部上半の立ち上がりに関しては、内彎しているものが多い。このため、口径の差異によるサイズ分類は内彎状鉢と同様の区分基準を用いて行い、結果として、極大・大・中形の3細別器形に分類した。

・内彎状深鉢（図 4: 42）

上記の諸器形に分類不可能なやや深い器形を呈するものを一括した。該当資料が僅少であるため、細別を行っていない。

・ブレッドモールド（Bread mold）（図 4: 43-46）

ナイル河下流域先王朝期の研究において、上記の名称で知られてきた器形である。器壁が極めて厚く、基本的に丸底を呈する。全体的にかなり粗雑に成形されている。

・円筒形容器（図 3: 44, 45）

底部から口縁部にかけて器壁が直立する器形である。この器形は、ナイル河下流域の後期先王朝時代（Naqada Ⅲ期）に特徴的な器形を含み、ほぼ全てがナイル河下流域系土器である。EB Ⅰ b 期においてのみ認められる。

以上の分類に基づき、時期別・遺跡類型別に器形の出現状況の差異について検討する。

EB Ⅰ a 期における対象遺跡出土土器の器形組成分析

EB Ⅰ a 期の対象遺跡は、遺跡類型 B がタウル・イクベイネ遺跡（Taur Ikhbeineh）とサイト H 遺跡（Site H）、遺跡類型 C がテル・ハリフ・テラス遺跡 101 地点（Tel Halif Terrace Site 101）、ラキシュ遺跡（Lachish）、及びアフリダール遺跡 E 地点（Afridar Area E）、遺跡類型 D がニッザニム遺跡（Nizzanim）であり、遺跡類型 A 及び E に該当する遺跡は認められなかった[7]。

本稿の土器類型に従って、各遺跡において出現する器形のヴァリエイション数（以下、器形数と記述する）を提示したものが図5上段である。グラフでは、各遺跡類型を垂直線で区切って表示している。まず、ナイル河下流域系土器の器形数について、遺跡類型 B の2遺跡においては、ナイル河下流域系土器の器形数が相対的に顕著であることを確認できる。一方、遺跡類型 C にあたる3遺跡においては、ナイル河下流域搬入・在地産土器が1器形のみ認められ、遺跡類型 D のニッザニム遺跡に至っては全く認められないということを看取できる[8]。

次は、出現するナイル河下流域系土器の種類に関して説明する。遺跡類型 B においては、鉢類におけるサイト H 遺跡を例外として、壺・鉢両類においてナイル河下流域系搬入・在地産土器が認められる。これに対して、遺跡類型 C では、アフリダール遺跡を除いて、壺類においてはナイル河下流域系搬入土器が、鉢類ではナイル河下流域系在地産土器が専ら認められ、土器類型が器形と相関していた可能性を示唆している。以上の傾向差から、遺跡類型の区分がおおよそ妥当であることを理解できる。

続いて、遺跡類型を単位として、ナイル河下流域系土器の器形の種類に関して、各類型間の比較を行う。表3は、各遺跡の器形組成を示したものである。まず、ナイル河下流域系土器の器形に着目して壺類を散見すると、遺跡類型 B において認められる器形は、遺跡類型 C 以下において認められる器形を必ず含んでいるという傾向が明らかである。具体的には、遺跡類型 C において出現する長球状・球状小形壺、広口長頸長胴壺は全て、遺跡類型 B において認められたナイル河下流域系土器器形中に存在するとい

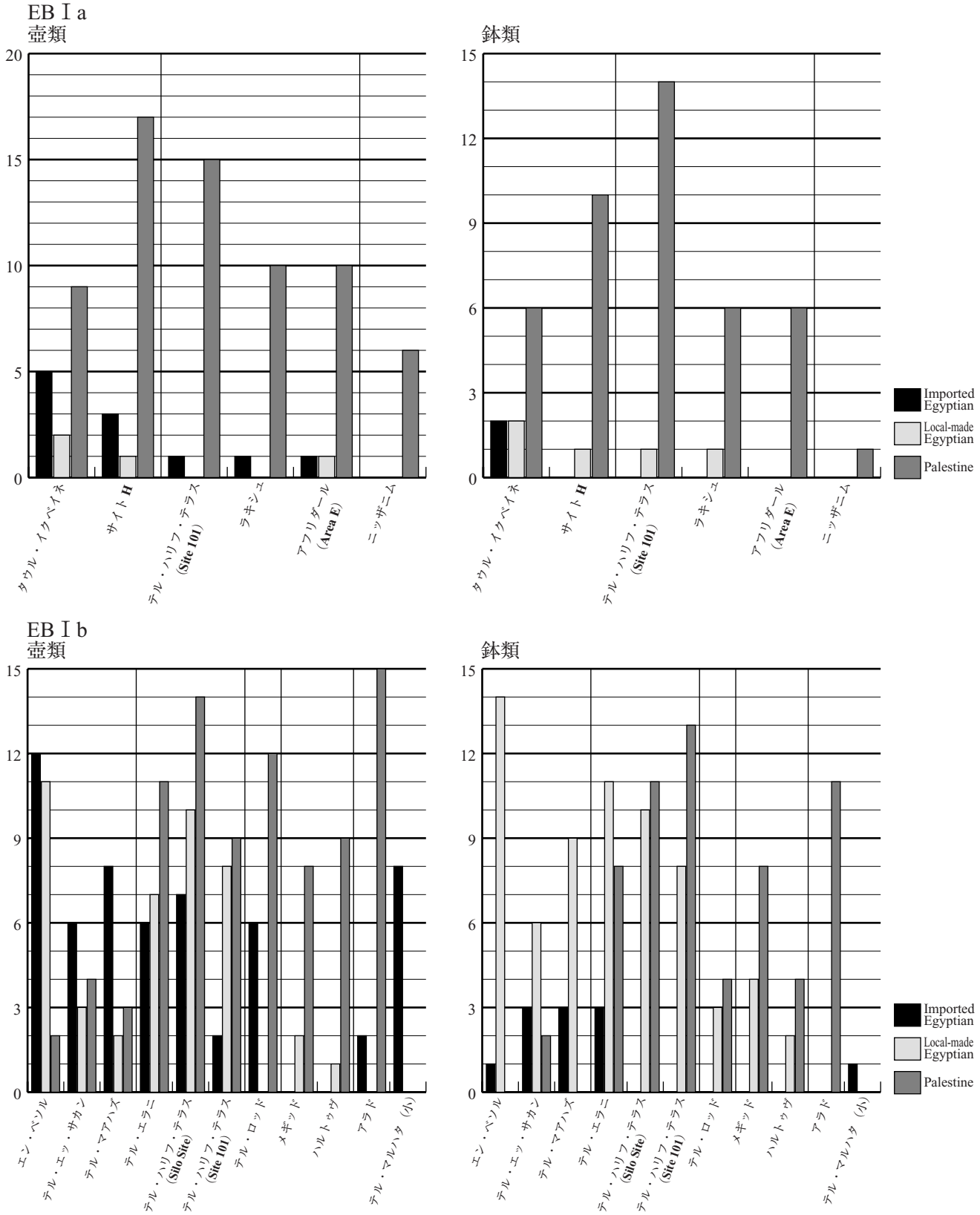


図５　EB Ⅰ a/b 期における土器類型別の器形数

表３　EB Ｉａ期出土土器の器形組成

壺類

器形	遺跡	タウル・イクベイネ			サイト			テル・ハリフ・テラス (Site 101)			ラキシュ			アフリダール			ニッザニム		
		IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P
短頸壺	極大形・頸部直立内傾			○				●					○			○			
	極大形・頸部外反外傾						○	●		○			○			○			○
	大　形			○	○		○	●		○			○			○			
	中形・頸部直立内傾	○					○	●		○		●				○			○
	中形・頸部外反外傾	○		○			○	●		○		●							
	小形・頸部直立内傾			○				●											
	小形・頸部外反外傾						○	●		○						○			
長頸壺	細口長頸壺	○					○			○						○			○
	広口長頸壺			○			○			○		●	○			○			
	広口長頸長胴壺	○									○								
小形壺	長球状	△	○		○	○	○			○		●	○	○	○			●	
	球　状		○				○	○		○		●	○	●				●	
	有段頸部						○						○						
無頸壺	大形・肩部角度緩			○			○	●		○			○			○			○
	大形・肩部角度急						○	●		○									
	中形・肩部角度緩	○		○			○	●		○			○			○			○
	中形・肩部角度急	△	△	○	○		○	●		○			○			○			
	小形・肩部角度緩						○	●		○									
	小形・肩部角度急			○			○	●		○									
	把手付無頸長胴壺			●			○			●			●			●			○

鉢類

器形	遺跡	タウル・イクベイネ			サイト			テル・ハリフ・テラス (Site 101)			ラキシュ			アフリダール			ニッザニム		
		IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P
直線口縁鉢	大形・器壁緩		○				○			○		○				○			
	大形・器壁急							●	●	○									
	大形・器壁直立			○			○		○	○									
	中　形	○	○	○			○			○						○		●	
	小形・器壁緩			○		○				○									
	小形・器壁急									○									
内彎状鉢	大形・器壁外傾			○			○	●	●	○		●				○		●	○
	大形・器壁内湾			○			○			○		●	○						
	中形・器壁外傾			○			○			○			○			○			
	中形・器壁内湾						○			○		●	○			○			
	小形・器壁外傾						○			○			○					●	
	小形・器壁内湾（浅鉢）						○			○			○					●	
	小形・器壁内湾（深鉢）						○			○		●	○			○		●	
外反口縁鉢										○					●				
ブレッドモールド		○				●		●	●						●				

*1 ○＝存在、●＝存在可能性、△＝ナイル河下流域系土器が搬入か在地産か不明
*2 IE＝ナイル河下流域系搬入土器、LE＝ナイル河下流域系在地産土器、P＝パレスティナ地域系土器

うことである。すなわち、各遺跡類型は他の遺跡類型に対して排他的な器形を有さない。なお、鉢類においては、この傾向は顕著なものではない。ただし、全遺跡類型に関して、確実に存在するナイル河下流域系土器の器形は直線口縁鉢のみであるという状況を特徴として挙げることができよう。

最後に、ナイル河下流域系土器とパレスティナ地域系土器の器形種類の重複状況はどうであろうか。上と同様に表3を参照する限りでは、壺類及び鉢類においてパレスティナ地域系土器とナイル河下流域系土器は大枠で器形種類が重複する傾向がある。以下、遺跡類型別に検討してみる。遺跡類型Bにおいては、壺類の3大別器形（短頸壺、長頸壺、無頸壺）と鉢類の直線口縁壺では器形の重複が認められた。また、壺類の広口長頸長胴壺及び小形壺類では、タウル・イクベイネ遺跡においてナイル河下流域系土器の単独出土が認められるが、サイトH遺跡の状況を考慮に入れれば、パレスティナ地域系土器の器形と重複している可能性も考えられる。なお、パレスティナ地域系土器と唯一確実に重複していないナイル河下流域系土器として、ブレッドモールドが注目に値する。これはタウル・イクベイネ遺跡出土の資料であるが、後述のEB Ⅰb期において認められるブレッドモールドとは異なる器形を呈している。ただし、両者ともに厚い器壁を有する点が特徴的であり、この特徴を有しているパレスティナ地域系土器を確認することはできなかった。遺跡類型Cにおいては、各遺跡について検討した場合には必ずしも両地域系土器の器形が重複しているとはいえないものの、総合的に見れば、壺類の広口長頸長胴壺を除いて全て器形ヴァリエイションが重複している状況を認められる。遺跡類型Dに関しては、上述のように、存在が確実に認められるナイル河下流域系土器の器形に欠くため、パレスティナ地域系土器の器形との重複関係について論じることが事実上不可能である。

以上をまとめると、EB Ⅰa期におけるナイル河下流域系土器を伴う遺跡では、ナイル河下流域系土器の出土割合が高ければ、同土器の器形数も多いという比例の関係、すなわち「正の相関」が認められた。さらに、確認できた全ての遺跡類型において、ナイル河下流域系土器の器形種類は、パレスティナ地域系土器の器形種類にはるかに及ばないという傾向を看取でき、また、両地域系土器の器形種類の重複が基本的には顕著に認められ、特にその棲み分けは認められなかった。

EB Ⅰb期における対象遺跡出土土器の器形組成分析

EB Ⅰb期の対象遺跡は、遺跡類型Aがエン・ベソル遺跡（'En Besor)、テル・エッ・サカン遺跡（Tell es-Sakan)、及びテル・マアハズ遺跡（Tel Ma'ahaz)、遺跡類型Bがテル・エラニ遺跡（Tel 'Erani)、テル・ハリフ・テラス遺跡サイロ地区（Tel Halif Terrace - Silo Site)、及びテル・ハリフ・テラス遺跡101地区（Tel Halif Terrace Site 101)、遺跡類型Cがテル・ロッド遺跡（Tel Lod)、遺跡類型Dがメギッド遺跡（Megiddo）及びハルトゥヴ遺跡（Hartuv)、遺跡類型Eがアラド遺跡（Arad）及びテル・マルハタ遺跡（小丘）(Small Tel Malhata)、計11遺跡である[9]。

EB Ⅰa期の場合と同様に、本稿における土器類型に従って、図5下段において各遺跡において出現する器形数を提示し、全体的な傾向を概観しておく。

まず、壺類に関して、ナイル河下流域系搬入土器の器形の出現頻度が相対的に高いということを指摘できる。これはEB Ⅰa期における状況と類似しているが、遺跡類型Bに該当する全ての遺跡においては、搬入土器よりもむしろ在地産土器の器形数のほうが顕著であり、EB Ⅰb期における大きな特徴となっている。また、遺跡類型Cのテル・ロッド遺跡ではナイル河下流域系搬入土器の存在のみが認められ、上記の特徴をより顕著に示している。

一方、鉢類に関しては、ナイル河下流域系在地産土器の器形数が搬入土器に比して多いという傾向を見出せ、壺類と正反対の特徴を有している。この傾向は、遺跡類型B/C/Dにおいて顕著であり、これら類型に属する遺跡では、テル・エラニ遺跡を除いて、ナイル河下流域系搬入土器の存在を認めることができなかった。また、遺跡類型Aにおいても、ナイル河下流域系搬入土器が認められるものの、その器形数が極めて少ない。最後に、遺跡類型Eでは、ナイル河下流域系搬入土器はアラド遺跡では皆無、テル・マルハタ遺跡（小丘）においても1器形のみが認められるのみであった。以上をまとめて、EB Ⅰb期においても遺跡類型区分がおおよそ妥当であるということが示されたと考える。

さて、以下では遺跡類型別の器形のより詳細な比較・検討に移る。表4は、EB Ⅰa期の検討において示したものと同様に、遺跡別に器形組成を示したものである。まず、ナイル河下流域系土器の器形について、壺類における傾向を検討する。

壺類では、最も多くの器形が認められるのは、遺跡類型Aのエン・ベソル遺跡であり、遺跡類型C/D/Eにおいて出現する器形とほぼ重複する傾向が認められる。しかしながら、遺跡類型Bに関しては、異なる傾向を見出すことが可能である。まず、遺跡類型Aとの重複器形について見てみると、遺跡類型Aにおいて認められた器形が大枠で見れば全て認められる。そしてさらに、遺跡類型Bに特有の器形が認められる。これは、テル・ハリフ・テラス遺跡サイロ地区及び101地区出土の広口長頸壺と細口長頸

表４　EB Ⅰ b 期出土土器の器形組成形組成

壺類

器形	遺跡	エン・ベソル			テル・エッ・サカン			テル・マアハズ			テル・エラニ			テル・ハリフ・テラス（Silo Site）			テル・ハリフ・テラス（Site 101）			テル・ロッド			メギッド			ハルトゥヴ			アラド			テル・マルハタ（小）		
		IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P
短頸壺	極大形・頸部直立内傾	△	○		△	△		○	●						○				○	○		○												
	極大形・頸部外反外傾															○						○			○			○			○			●
	大形・頸部直立内傾	△	△					○	●				○		○			○		○					○			○				○		
	大形・頸部外反外傾	△	△		○										○	○		○							○			○			○			●
	中形・頸部直立内傾	△	○		○			○	●		○	○	○	△	○	○		○	○			○						○			○	○		●
	中形・頸部外反外傾	△	△					○	●		○	○	○		○	○			○	○		○			○			○			○	○		●
	小形・頸部直立内傾	△	○		△	△		○	●		○			△	△		○	○	○					○	○		○?		○			○		
	小形・頸部外反外傾	△	△					○	●			○		△	△	○	○			○												○		
長頸壺	細口長頸壺									●								○	○												○			
	広口長頸壺									●			○		○	○						○									○			
	フラスコ形壺												○									○						○			○			
	狭口長頸長胴壺								○																									
小形壺	長球状	△	○								○	○																						
	球　状	△	△		△	△		○		●	○	○	○	○		○				○		○									○	○		●
	環状把手付球状						○						○									○						○						●
	フラスコ状															○						○									○			●
	注口付											○	○																			○		
無頸壺	大形・肩部角度緩						○						○			○						○			○						○			●
	大形・肩部角度急						○							○		○			○			○			○						○			●
	中形・肩部角度緩			○			○			○			○	△	○	○			○			○			○			○			○			●
	中形・肩部角度急									○			○			○		○	○					○				○			○			●
	小形・肩部角度緩	△	△	○						○						○		○	○												○			●
	小形・肩部角度急	△	△									○			○	○		○													○			●

鉢類

器形	遺跡	エン・ベソル			テル・エッ・サカン			テル・マアハズ			テル・エラニ			テル・ハリフ・テラス（Silo Site）			テル・ハリフ・テラス（Site 101）			テル・ロッド			メギッド			ハルトゥヴ			アラド			テル・マルハタ（小）		
		IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P	IE	LE	P
直線口縁鉢	大形・器壁角度緩								○			○			○	○		○																
	大形・器壁角度急		○												○																			
	大形・器壁直立		○													○		○	○															
	中形・器壁角度緩		○						○			○							○						○									
	中形・器壁角度急		○																○								○							
	小形・器壁角度緩								○			○	○						○												○			
	小形・器壁角度急														○			○	○															
内彎状鉢	極大形		○			○			○			○	○		○			○							○						○			
	大形・器壁外傾		○		△	△	○		○						○	○		○							○						○			
	大形・器壁内湾		○				○				△	△	○		○?	○			○						○			○			○			
	中形・器壁外傾		○		△	△		○			△	△	○			○		○	○			○			○		○	○			○			
	中形・器壁内湾		○								○	○	○			○			○						○			○			○			
	小形・器壁外傾									●		○	○			○			○			○			○						○			
	小形・器壁内湾	○	△							●			○			○			○			○									○			
外反口縁鉢	大　形		○		△	△			○					●	○			●						○										
	中　形		○			○		○	○			○		●	○			●			○			○										
	小形・浅鉢形							○	○					●				●			○													
	小形・深鉢形											○?		●				●	○															
内彎状浅鉢	極大形												○			○									○						○			
	大　形		○												○	○						○									○	○		
	中　形															○		○	○					○							○			
内彎状深鉢																			○					○				○						
ブレッドモールド			○			○			○			○			○			○			○													
円筒形容器		○			○			○	○?		○			○						○									○			○		

*1 ○＝存在、●＝存在可能性、△＝ナイル河下流域系土器が搬入か在地産か不明
*2 IE＝ナイル河下流域系搬入土器、LE＝ナイル河下流域系在地産土器、P＝パレスティナ地域系土器

壺である。また、遺跡類型 A/C/D/E のナイル河下流域系土器の器形の中で希薄な存在である無頸壺が相対的に顕著であるという状況も遺跡類型 B の特徴であり、他の遺跡類型に対する特異性を際立たせている。

次に、鉢類についても、やはり遺跡類型 B の特異性が顕著であるといえる。まず、遺跡類型 A において出現するナイル河下流域系土器の器形は遺跡類型 C/D/E における器形をほぼ完全に網羅しているという、壺類の場合と同様の傾向を指摘できる。遺跡類型 B に関しては、遺跡類型 A において認められた主要な器形がほぼ全て存在する以外に、内彎状浅鉢がやや顕著に認められる。

以上の検討から、EB Ⅰ b 期においては、遺跡類型 A と遺跡類型 B の特異性が明らかになった。この特異性をより明確にするために、ナイル河下流域系搬入・在地産土器、及びパレスティナ地域系土器の器形の重複関係について、主として遺跡類型 A と遺跡類型 B に着目して詳細な分析を行う。

まず、遺跡類型 A では、ナイル河下流域系土器とパレスティナ地域系土器の出土割合比を反映して、パレスティナ地域系土器の器形数は極端に少ない。すなわち、パレスティナ地域系土器は、壺類においては環状把手付球状小形壺及び無頸壺、鉢類においてはテル・エッ・サカン遺跡出土の大形内彎状鉢に限定されるのである。これに対して、遺跡類型 B のパレスティナ地域系土器は、ナイル河下流域系土器とほぼ同じ種類・数の器形を有しており、それぞれが独立したアッセンブリッジを構成しているとみなすことが可能である。中でも、とりわけ重複が顕著であるのは、壺類においては短頸壺及び無頸壺、鉢類においては内彎状鉢である。また、遺跡類型 C/D/E では、壺・鉢類ともにパレスティナ地域系土器の器形数がナイル河下流域系土器の器形数を上回り、壺類では、前者が後者の器形をおおよそ包含している。一方鉢類では、テル・ロッド遺跡とメギッド遺跡において、内彎状鉢とブレッドモールドにナイル河下流域系土器が集中的に存在する。そして、上記に加えてナイル河下流域系土器のみに認められる円筒形容器を除いて、その他の器形ではパレスティナ地域系土器のみが認められる傾向を見出すことが可能である。以上から、両地域系土器の器形に棲み分けを指摘できよう。なお、ハルトゥヴ遺跡においては例外的に器形の棲み分けが認められなかった。

以上の分析結果を考察すると、遺跡類型間の傾向差として２種類の差異を指摘できる。すなわち、量的差異と質的差異である。量的差異とは、ナイル河下流域系土器の出土割合と器形数の比例関係（「正の相関」）に基づくものであり、出土割合が大きな遺跡におけるほど器形数も多い状態を指す。本稿の遺跡類型に当てはめれば、遺跡類型 A に比して遺跡類型 C におけるナイル河下流域系土器の器形数が少ないという状態である。この場合、両者に見られる差異は量的な条件に基づいたものと考えることができる。他方、質的差異では、ナイル河下流域系土器の出土割合が器形数と比例関係にない状態であり、したがって出土割合が大きな遺跡であっても器形種類が必ずしも多いとは限らず、逆もまたありうる。

量的差異は、遺跡類型 A と遺跡類型 C/D/E の間、遺跡類型 C と遺跡類型 D/E の間に、また、遺跡類型 B と遺跡類型 C/D/E の間にも確認できる。しかしながら、遺跡類型 A と遺跡類型 B の間に質的差異が認められることは興味深い。遺跡類型 B では、ナイル河下流域系土器の出土割合が全体の 50 ％未満であり、実際には対象遺跡全てがこの数値に達しているわけではないにも関わらず、ナイル河下流域系土器の器形数が遺跡類型 A においてと同様に多く認められる。先述のように、遺跡類型 A ではナイル河下流域系土器が全体の土器出土割合の 80 ％以上を占めており、「正の相関」に則るならば、遺跡類型 B において認められるナイル河下流域系土器の器形よりも多くの種類の器形が認められるはずである。この特異な現象は、EB Ⅰ a 期から EB Ⅰ b 期に至るパレスティナ地域－ナイル河下流域間関係の重要な変化を示唆しうると考えて差し支えないのではなかろうか。

近年仮説の妥当性―植民・移住、核ー周縁モデル

EB Ⅰ a/b 期パレスティナ地域におけるナイル河下流域との関係は、近年のミロシェジに代表されるように、人間集団の移住の想定、及び核－周縁モデルの適用により、簡略化して提示される場合が目立つ。例えば、ミロシェジが述べるところによれば、EB Ⅰ a 期においては、パレスティナ地域とナイル河下流域北部デルタ部との関係が専ら存在し、後者からの人間集団の移入が行われたという（Miroschedji 2002: 40-41）。また、EB Ⅰ b 期においては、ナイル河下流域の人間集団による直接的な植民・移住活動が本格的に行われ、その範囲はパレスティナ地域北部にまで達していたと結論付けられている（Miroschedji 2002: 43-44）。上記のうち、特に EB Ⅰ b 期に関しては、ミロシェジのみならず近年の諸研究者により核－周縁モデルの適用が強く意識されていると考えられる。以下では、先述の分析結果を加味して、当該期のパレスティナ地域についてミロシェジにより提示された各時期における状況に関して、解釈の妥当性を検証する。

まず、EB Ⅰ a 期について、ナイル河下流域系土器の器形数は全体的に限られており、その数が相対的に多いタウル・イクベイネ遺跡においてさえ、搬入土器の壺類に関しては器形上おおよそ網羅的に出現しているものの、同在地

産土器の壺類や鉢類については器形数・種類ともに限定的であることはすでに述べた。同様の傾向は当然、器形数のより少ないサイト H 遺跡についてもあてはまる。遺跡類型 C のテル・ハリフ・テラス遺跡（Site 101）に関しては、表 3 で示した器形数・種類よりも多くが実際には認められる可能性がある。しかし、分析結果として提示した EB Ⅰ a 期における遺跡類型間に認められる量的差異を念頭に置くならば、元来の出土割合が極めて限られているので全体的な器形数・種類についてそれほど増加するとは考えられない。以上より、現段階では、EB Ⅰ a 期におけるナイル河下流域の人間集団による植民・移住の想定は困難であると判断する。

次に、EB Ⅰ b 期については、パレスティナ地域とナイル河下流域の関係に対する核－周縁モデルの適用が顕著であることは既に述べた。このモデルは I. ウォーラーステイン（Wallerstein）による「世界システム」（ウォーラーステイン 1981a, 1981b）を下敷きにして構築されており、彼の論考では、以下の 3 つの仮定が常に認められるという（Stein 1999: 16-26）。

1）「中核」（核）の「辺境」（周縁）に対する技術的・組織的優位と支配的地位
2）「中核」と「辺境」（周縁）の間の非対称的な交易関係（前者が統制する。）
3）2）の関係による、「辺境」における社会変化の惹起

以上のように、核（「中核」）が周縁（「辺境」）に対して、技術的、経済的、そして文化的優位を常に保持しているという想定がなされている。この構図は、G. アルガゼ（Algaze）により、同じく核地域と周縁地域の非対称な交易関係を想定・強調するウルク・ワールド・システムという形で前 4 千年期のメソポタミアとその周辺地域に対して適用されている（Algaze 1989, 1993, 2001）。

アルガゼの影響を少なからず受けて、同様の構図をナイル河下流域とその周辺（パレスティナ地域を含む。）との関係に適用したものが核－周縁モデルであると言える。すなわち、レヴィとヴァン・デン・ブリンクは、パレスティナ地域から出土するセレクを根拠に、第 1 王朝エジプトのナルメル王により統制された両地域の非対称（＝不平等）な交易関係を示しており、上述の「中核」と「辺境」の間の関係についての仮定 1）及び 2）を解釈に用いていることが明らかである（Levy and van den Brink 2002: 28）。また、ペレス－ラルガチャもその論考において、「1 次的国家」及び「2 次的国家」という用語を使用してはいるが、基本的には「中核」（核＝ナイル河下流域）と「辺境」（周縁＝パレスティナ地域）の関係の非対称性（前者の後者に対する優位性）、この両地域間関係への第 1 王朝エジプトの行政の直接的関与（交易の統制）を想定しており、上述の仮定 1）及び 2）に一致する（Perez-Largacha 1995: 89-91）。さらに、上述の仮定 3）に対応する見解として、ナイル河下流域（エジプト）との交易関係の衰退あるいはナイル河下流域の人間集団のパレスティナ地域からの消滅の後にパレスティナ地域における都市化が引き起こされたと述べ、ナイル河下流域（エジプト）の直接の影響によるパレスティナ地域における都市化の開始に否定的見解を示す一方、それ以前の時期におけるパレスティナ地域（＝周縁（periphery））の社会的に従属的な位置づけを鮮明にしている（Levy and van den Brink 2002: 27; Perez-Largacha 1995: 90）。

しかしながら、以上に見た核－周縁モデルの適用による諸解釈は、本稿における分析結果に必ずしも適合しない。上記の解釈は、土器やセレク刻文土器片に代表されるナイル河下流域系遺物の存在あるいはその増加のみに基づいていることが大きな問題であろう。ミロシェジの場合、これにナイル河下流域系遺物の出土分布を加えて、ナイル河下流域の人間集団によるパレスティナ地域における植民活動の拡大、テル・ロッド遺跡にまで及ぶ武力による支配ではない平和的な定住（「恒久的な居留」）が想定されているものの、同時に、ナイル河下流域の植民者たちによるパレスティナ地域南部の搾取という非対称な関係が示される（Miroschedji 2002: 41-44）。しかしながら、遺物の量的増加や分布地域の拡大のみから、人間集団の移動やさらには核－周縁モデルのような包括的な枠組みを適用することはかなり困難であると考えられる。

確かに、当該期のパレスティナ地域におけるナイル河下流域系物質文化の出現範囲は北部にまで達するが、ナイル河下流域系土器の器形数・種類の多寡を考慮して実際の居住を想定するならば[10]、ナイル河下流域の人間集団の居住はパレスティナ地域南部の南西部分のみ、すなわち遺跡類型 A/B の分布範囲に限定される可能性がある。さらに、ナイル河下流域系土器の器形数・種類が多く、また、土器以外の遺物の出土も多種類認められることから、パレスティナ地域南部の海岸平野地域は、ナイル河下流域（エジプト）により唯一かつ最も強い影響下に置かれていた地域と捉えられる。したがって、従来提示されてきた、ナイル河下流域（エジプト）のパレスティナ地域へのより広域に対する恒常的な優位性の想定とは異なる枠組みによる説明が必要になるのである。

交換関係の変遷

近年の諸仮説の妥当性について検討してきたが、以下では、本稿での土器の器形組成分析の観点から、両地域の関係の変遷について枠組みを示すことを試みる。

EB Ⅰ a 期に関しては、パレスティナ地域におけるナイ

ル河下流域系遺物（土器を含む）の出現数・種類は、相対的に南部では密である一方、北部では希薄であり、ナイル河下流域からの距離の遠近との強い相関関係が窺える。このことは、遺跡類型間に見られるナイル河下流域系土器の器形数・種類の差異にも反映されており、器形数・種類が最も多い遺跡類型Ｂの遺跡はより南に位置し、種類・数ともに少ない遺跡類型Ｃ、遺跡類型Ｄの順番に徐々に北寄りの分布を示す。また、ナイル河下流域系土器の出土割合と器形数・種類との「正の相関」のみが認められることから、パレスティナ地域内における諸遺跡類型間には、ナイル河下流域系物質文化との関係を示唆する規則的・体系的な差異（質的差異）が認められない。加えて、ナイル河下流域系土器の器形数・種類が全体的に貧弱であることを考慮すれば、パレスティナ地域において見られる両地域間関係は、本質的にナイル河下流域からの距離に規定されており、また、パレスティナ地域へのナイル河下流域の人間集団の居住を伴わないより直接的なものであった蓋然性が高い（図６左）。

続くＥＢＩｂ期には、ＥＢＩａ期と比べて、パレスティナ地域内における両地域間関係の複雑化・体系化が進行したことが示される。すなわち、本稿の分析対象遺跡に関しては、先述のように、分析の便宜上設定した遺跡類型間に量的及び質的差異を認識することができた。

さて、当該期におけるナイル河下流域－パレスティナ地域間関係について、その物質文化上の関係から検討すると、ナイル河下流域（エジプト）（Core）のパレスティナ地域（Periphery）に対する恒常的・普遍的な優位性を前提とする核－周縁モデルによる両地域間関係の説明は、先述のように大きな問題を孕んでいる。

では、適切な代替モデルは存在するのか。例えば、G.ステインの距離－同等モデル（Distance-Parity model）が挙げられる。先述のアルガゼによるモデルへの代替案の１つとして提示されたこのモデルでは、「核」（Core）からの距離が離れるほどに軍事的・経済的な力を背景とした「核」（Core）による影響力が弱まるとされる（Stein 1999: 62）。これは、上述のパレスティナ地域におけるナイル河下流域系遺物の出現様態に矛盾しないため、大枠で受け入れることができる。しかし、現象面により立脚した場合、やはり問題がある。なぜなら、「核」（Core）に最も近いパレスティナ地域南部の南西部分においては、ナイル河下流域系土器が他地域の遺跡（類型）に比べ数量上多く出土する遺跡（類型）を認めることができるが、これらの遺跡はナイル河下流域系土器の出土割合に顕著な差がある遺跡類型A/Bに属するからである。

遺跡類型Ａのエン・ベソル遺跡やテル・エッ・サカン遺跡は、その出土資料のほとんどがナイル河下流域系の遺物であり、土器の器形数・種類についてもパレスティナ地域系土器はナイル河下流域系土器にはるかに及ばない。このため、特にエン・ベソル遺跡については、従来、ナイル河下流域系の人間集団による「前哨地」（Outpost）、「駐屯地」（Station）、あるいは「交易拠点」（Trading post）であると考えられてきた（Gophna 1987, 1992; Gophna and Gazit 1985 etc.）。一方、遺跡類型Ｂのテル・エラニ遺跡とテル・ハリフ・テラス遺跡（Silo Site/Site 101）では、ナイル河下流域系土器よりもパレスティナ地域系土器のほうが出土割合の上で常に多い。また、ナイル河下流域系土器とパレスティナ地域系土器が多くの器形で重複して出現しており、ナイル河下流域系土器とパレスティナ地域系土器のそれぞれが独立したアッセンブリッジを構成しているように見える。

以上より、物質文化的な意味で状況の異なる遺跡類型A/Bが特定地域内で並存していたと考えられるのである。この状況は何を示しうるのか。１つの可能性として、遺跡類型Ｂの諸遺跡を、物質文化上ナイル河下流域系要素が主体的である遺跡とパレスティナ地域系要素が主体的である遺跡の中間に位置する両者の「交換の場」と捉えることができるかもしれない。この「交換の場」は物質文化的にパレスティナ地域系主体であり、これとは独立してナイル河下流域系の物質文化的要素が安定的に存在する。この遺跡類型Ｂにおけるナイル河下流域系の物質文化的要素は、その器形種類の出揃い方から、ナイル河下流域自体あるいは「交易拠点」と推測される遺跡類型Ａに属する遺跡の直接的影響下に成立したナイル河下流域（エジプト）の出先機関的な性質を帯びると捉えることもでき、この「交換の場」を利用してパレスティナ地域との物質文化上の交換が行われた可能性がある。

実際、遺跡類型Ｂのテル・エラニ遺跡では、ナイル河下流域系とパレスティナ地域系の両土器の構成要素（形態・器面調整・胎土等）が混合した「混成」（hybrid）土器を一定数量確認でき（Brandl 1989）、物質文化上の相互への影響が見られる。さらに、やや離れた遺跡との関係として、遺跡類型Ｂのテル・エラニ遺跡と遺跡類型Ｄのハルトゥヴ遺跡出土のナイル河下流域系在地産土器の間には、製作技法・胎土上の類似が認められる（Porat 1996: 35; Mazar and Miroschedji 1996: 23-24）。また、遺跡類型Ｃのテル・ロッド遺跡出土のナイル河下流域系在地産土器に関しても、胎土について上述と同様の類似が報告されている（van den Brink 2002: 198）。

これらの現象から、遺跡類型Ｂの少なくともテル・エラニ遺跡におけるナイル河下流域系物質文化と、ナイル河下流域系物質文化を伴うもののパレスティナ地域系物質文化が主体的な遺跡（遺跡類型C/D）との間には、何らか

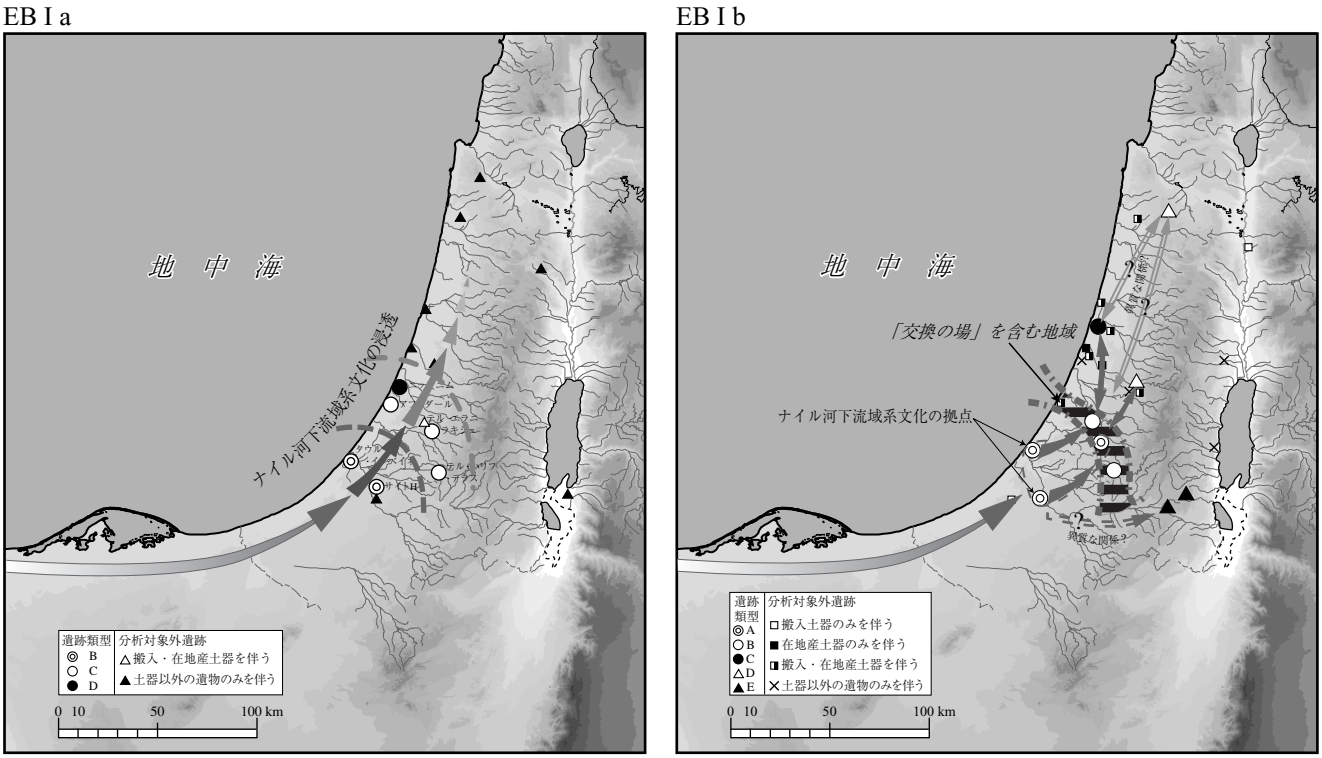


図 6　EB Ⅰ a/b 期における交換関係の変遷

の交換関係があったということを推測できる。現段階では、この交換関係が成立していた場所を特定しがたいが、遺跡類型 B の少なくともテル・エラニ遺跡は、遺跡類型 A と遺跡類型 C/D の間に介在して、ナイル河下流域系物質文化とパレスティナ地域系物質文化の「交換の場」として機能していたと考えられる（図 6 右）。

なお、上記で触れなかった遺跡類型 E の諸遺跡に関しては、ナイル河下流域系搬入土器しか出土しておらず[11]、また、他の遺跡類型の諸遺跡と異なり、パレスティナ地域南東部の最も南部分に立地していることを考慮する必要がある。ナイル河下流域系搬入土器に加えてセレク刻文を伴う土器片のみが少量出土する状況は、テル・アヴィヴ（リシュポン 4）遺跡（Tel Aviv Rishpon 4）（Ritter-Kaplan 1991）やパルマヒム遺跡（Palmahim Quarry）（Braun 2002: 178-179; Braun et al. 2001: 66-73）といった北部に近接した諸遺跡においても認められる。ところが、これらの遺跡よりさらに北部に位置する遺跡においては、ナイル河下流域搬入・在地産土器両者が共伴する可能性がある一方、セレクの刻まれた遺物（特に細身の大形壺形土器）に関してはその存在を全く確認できない。これは、遺跡類型 E に見られる交換関係が、単に距離の遠近の制約によるものではなく、他の遺跡類型において見られた交換関係とは異なった仕方で行われた結果として捉えられるのがより適切であろう。この異質な交換関係は、今後さらに検討すべき課題である。

おわりに

以上、EB Ⅰ a/b 期のパレスティナ地域から出土するナイル河下流域系土器の器形組成分析を通じて、両地域の関係の変遷を核－周縁モデルとは異なる枠組みで理解することを試みた。結果として、1）ナイル河下流域系文化によるパレスティナ地域南部への直接的・間接的浸透、それに続き 2）パレスティナ地域南部の「交換の場」における交換関係の維持、そして 3）パレスティナ地域における交換関係の多様化、という変化について示しえたのではないかと思う。今後、新たな資料の増加に期待するとともに、他の遺物の検討結果（山藤 2006 等）との比較、当該期ナイル河下流域において認められるパレスティナ地域系物質文化の検討、及びパレスティナ地域に展開した在地の物質文化の検討を行うことにより、両地域間関係はより精緻化された形で提示されるであろう。

本稿は、2005 年 1 月 11 日に東京都立大学（現　首都大学東京）に提出した修士学位論文の一部を再構成したものである。修士学位論文の執筆に当たっては、当時指導教授であった小野昭先生を初めとして、高宮いづみ先生、佐野勝宏氏、小泉龍人先生、小高敬寛氏、西アジア勉強会の諸先輩・諸学友など、多くの方々に多大なるご教示・ご指導いただいた。また、本論文執筆の折には、現在の指導教授である近藤二郎先生にご指導いただいた。この場をお借りして、

謹んで御礼申し上げる次第である。

註

1）本稿では、対象地域を「パレスティナ地域」と呼称し、その範囲を現在のイスラエル（ネゲヴ砂漠以南を除く）、パレスティナ、ヨルダン西端部北半、レバノン南端部とする。

2）本稿では、先王朝期における地域呼称には一貫してこの名称を使用することにしている。というのは、「エジプト」という用語を仮に先王朝期にまで拡大して使用してしまうと、未だ国家形成が行われていないにもかかわらずあたかも１地域の統合が成されているような錯覚を与えるからである。したがって、本稿では、地理的名称としての「ナイル河下流域」と第１王朝以後の政治的統合体を指す名称としての「エジプト」を区別して記述を行う。

3）ただし、アミランの言うところの交易関係は、「通常」の交易手段の１つとしての軍事的略奪行為の可能性を排除してはいない（Amiran 1974: 12（Note 43））。

4）記載岩石学的分析（Petrographic Analysis）とは、対象となる土器（片）を切断し、その断面の薄層のプレパラートを偏光顕微鏡により観察することで、混和物の種類やその化学変化から焼成温度を明らかにする胎土分析方法である。ポラートの分析方法では、この記載岩石学的分析による分類結果の妥当性を裏付けるために、中性子放射化分析（Neutron Activation Analysis（NAA））や誘導結合型プラズマ分光器（Inductively Coupled Plasma Spectroscopy（ICP））による全サンプルの胎土分析が併用されている（Porat 1989: 31-32）。

5）ポラートは、ナイル河下流域及びパレスティナ地域に所在するEB 期（多くはEB Ⅰ期）の遺跡からの出土土器（テル・エラニ遺跡とエン・ベソル遺跡ではレンガ片、エン・ベソル遺跡では印影も含まれる。）、1352 点（ナイル河下流域系＝ 303 点（16 遺跡＋北シナイ）、パレスティナ地域系＝ 1049 点（26 遺跡＋北シナイ））を対象として記載岩石学的分析を行った（Porat 1989: Appendix 1）。

6）本稿のような遺跡の分類はヴァン・デン・ブリンクとブラウンにより行われている（van den Brink and Braun 2003）。彼らの分類は、ナイル河下流域系土器及びその他の遺物の推定される出土割合に依るものであり、本稿と同様に５段階（Tier 1/2/3A/3B/4）である。

7）EB Ⅰ a 期における分析対象資料数は、各遺跡に関して以下のとおりである。なお、対象遺跡は全て集落遺跡である。
タウル・イクベイネ遺跡（第Ⅲ-Ⅳ層）：44 点、サイト H 遺跡（層序不明）：74 点、テル・ハリフ・テラス遺跡 101 地区（第Ⅲ-Ⅳ層）：147 点、ラキシュ遺跡（1500）：42 点、アフリダール遺跡 E 地点（層序不明）：22 点、ニッザニム遺跡（第Ⅳ層）：16 点

8）ニッザニム遺跡では、図版中にパレスティナ地域系土器のみしか見出すことができなかったが（Yekutieli and Gophna 1994）、ポラートによりナイル河下流域系土器の存在が示されているため（Porat 1989: Appendix 1）、暫定的に分析対象として取り上げた。

9）EB Ⅰ b 期における分析対象資料数は、各遺跡に関して以下のとおりである。なお、対象遺跡は全て集落遺跡である。ただし、メギッド遺跡出土のナイル河下流域系土器は神殿とされている遺構に一括埋納された状態で出土した（Finkelstein 2000; Finkelstein and Ussishkin 2003; Goren 2000）。
エン・ベソル遺跡（第Ⅲ層）：90 点、テル・エッ・サカン遺跡（A-9-A-6 層）：19 点、テル・マアハズ遺跡（第Ⅰ層）：61 点、テル・エラニ遺跡（第 C 層、Ⅵ-Ⅸ層）：77 点、テル・ハリフ・テラス遺跡サイロ地区（第Ⅱ層）：102 点、テル・ハリフ・テラス遺跡 101 地区（第Ⅱ層）：71 点、テル・ロッド遺跡（第Ⅳ層）：53 点、メギッド遺跡（J-4/4a 層）：58 点、ハルトゥヴ遺跡（第Ⅱ層）：28 点、アラド遺跡（第Ⅳ層）：101 点、テル・マルハタ遺跡（小丘）（第Ⅲ-Ⅳ層）：19 点

10）ここでは、暫定的な仮定として、ナイル河下流域系土器の器形種類が壺・鉢類において網羅的であり、また、器形数も多い場合に限定して、人間集団の居住を想定している。

11）特にアラド遺跡（第Ⅳ層）においては、ナイル河下流域系土器が４点出土している（Amiran et al. 1978: 51）。このうち１点にはセレクの刻印が施されている（Amiran 1974）。

引用・参考文献

Adams, B. and K. M. Ciałowicz 1997 *Protodynastic Egypt*. Shire Egyptology.

Algaze, G. 1989 The Uruk Expansion: Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. *Current Anthropology* 30 (5): 571-608.

Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago/London, The University of Chicago Press.

Algaze, G. 2001 Initial Social Complexity in Southwestern Asia. *Current Anthropology* 42 (2): 199-233.

Alon, D. and Y. Yekutieli 1995 The Tel Halif Terrace ‘Silo Site’ and its implications for the Early Bronze Age I. *‘Atiqot* 27: 149-189.

Amiran, R. 1974 An Egyptian Jar Fragment with the Name of Narmer from Arad. *Israel Exploration Journal* 24: 4-12.

Amiran, R. and R. Gophna 1992 The Correlation between Lower Egypt and Southern Canaan during the Early Bronze I Period. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th.-3rd. Millennium B.C.,* 357-360. Tel Aviv.

Amiran, R., U. Paran, Y. Shiloh, R. Brown, Y. Tssafrir and A. Ben-Tor 1978 *Early Arad I: The Chalcolithic Settlement and Early Bronze City, First-Fifth Seasons of Excavations, 1962-1966*. Jerusalem.

Amiran, R. and E. C. M. van den Brink 2001 A comparative study of the Egyptian pottery from Tel Ma’ahaz, Stratum I. In S. R. Wolff (ed.), *Studies in the Archaeology of Israel and Neighboring Lands in Memory of Douglas L. Esse,* 29-51. Chicago and Atlanta, Studies in Ancient Oriental Civilization/ASOR Book Series.

Amiran, R. and E. C. M. van den Brink 2002 The Ceramic Assemblage from Tel Ma’ahaz, Stratum I (Seasons 1975-1976). In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE,* 273-279. London/New York, Leicester University Press.

Beit-Arieh, I. and R. Gophna 1999 The Egyptian Protodynastic (Late EB I b) Site at Tel Ma’ahaz: A Reassessment. *Tel Aviv* 26: 191-207.

Ben-Tor, A. 1975 Two burial caves of the proto-urban period at Azor, 1971. *Qedem* I: 1-53.

Ben-Tor, A. 1986 The Trade Relations of Palestine in the Early Bronze Age. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 29: 1-27.

Ben-Tor, A. 1991 New Light on the Relations Between Egypt and Southern Palestine during the Early Bronze Age. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 281: 3-10.

Brandl, B. 1989 Observations on the Early Bronze Age Strata of Tel Erani. In P. de Miroschedji (ed.), *L’urbanisation de la Canaan à l’âge du Bronze ancien*, 357-387. Oxford, BAR International Series 527(ⅱ).

Brandl, B. 1992 Evidence for Egyptian Colonization in the Southern Coastal Plain and Lowlands of Canaan during the EB I Period. In E. C. M. van

den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th-3rd Millennium B.C.*, 441-477. Tel Aviv.

Braun, E. 2002 Egypt's First Sojourn in Canaan. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 173-189. London/New York, Leicester University Press.

Braun, E., E. C. M. van den Brink, R. Gophna and Y. Goren 2001 New evidence for Egyptian connections during the latter part of EB I, from the Soreq Basin in South-Central Israel. In S. R. Wolff (ed.), *Studies in the Archaeology of Israel and Neighboring Lands in Memory of Douglas L. Esse*, 59-98. Chicago and Atlanta, Studies in Ancient Oriental Civilization/ASOR Book Series.

Dessel, J. P. 1991 *Ceramic Production and Social Complexity in Fourth Millennium Canaan: A Case Study from the Tell Halif Terrace.* Ph.D. dissertation. University of Arizona.

Dreyer, G. 1992 Recent Discoveries at Abydos Cemetery U. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th.-3rd. Millennium B.C.*, 293-299. Tel Aviv.

Dreyer, G. 1998 *Umm el-Qaab I: Das prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse.* Mainz, Verlag Philipp von Zabern.

Finkelstein, I. and D. Ussishkin 2003 The Cache of Egyptianized vessels from Megiddo: A stratigraphical update. *Tel Aviv* 30 (1): 27-41.

Finkelstein, I., D. Ussishkin and B. Halpern (eds.) 2000 *Megiddo III: The 1992-1996 Seasons.* Tel Aviv.

Golani, A. and D. Segal 2002 Redefining the Onset of the Early Bronze Age in Southern Canaan: New Evidence of ^{14}C Dating from Ashkelon Afridar. In E. C. M. van den Brink and E. Yannai (eds.), *In Quest of Ancient Settlements and Landscapes: Archaeological Studies in honour of Ram Gophna*, 135-154. Tel Aviv, Ramot Publishing, Tel Aviv University.

Gophna, R. 1976a Excavations at 'En Besor (1970-1973). '*Atiqot* 11: 1-9. (English series).

Gophna, R. 1976b Egyptian Immigration into Southern Canaan during the First Dynasty?. *Tel Aviv* 3 (1): 31-37.

Gophna, R. 1980 Excavations at 'En Besor, 1976. '*Atiqot* 14: 9-16. (English series).

Gophna, R. 1987 Egyptian Trading Posts in Southern Canaan at the Dawn of the Archaic Period. In A. Rainey (ed.), *Egypt, Israel, Sinai; Archaeological and Historical Relationships in the Biblical Period*, 13-21. Tel Aviv, Tel Aviv University.

Gophna, R. 1990a The Early Bronze Ⅰ Settlement at 'En Besor Oasis. *Israel Exploration Journal* 40: 1-11.

Gophna, R. 1990b The Egyptian Pottery of 'En Besor. *Tel Aviv* 17: 144-162.

Gophna, R. 1992 The Contacts between 'En Besor Oasis, Southern Canaan, and Egypt during the Late Predynastic and the Threshold of the First Dynasty: a Further Assessment. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th.-3rd. Millennium B.C.*, 385-394. Tel Aviv.

Gophna, R. 1995 *Excavations at 'En Besor.* Tel Aviv, Ramot Publishing House, Tel Aviv University.

Gophna, R. 1996 Observations on the earliest phase of relations between Egypt and Canaan during the Early Bronze Age. In L. Krzyzaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Interregional Contacts in the Later Prehistory of Northeastern Africa*, 311-314. Poznan, Poznan Archaeological Museum.

Gophna, R. and D. Gazit 1985 The First Dynasty Egyptian Residency at 'En Besor. *Tel Aviv* 12: 9-16.

Goren, Y. 2000 Chapter 18: Technology, Provenience and Interpretation of the Early Bronze Age Egyptian Ceramic. In I. Finkelstein, D. Ussishkin and B. Halpern (eds.), *Megiddo III: The 1992-1996 Seasons*, 496-500. Tel Aviv.

Hartung, U. 1994 Bemerkungen zur Chronologie der Beziehungen Ägyptens zu Südkanaan in spätprädynastischer Zeit. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 50: 107-113.

Hartung, U. 2002 Imported Jars from Cemetery U at Abydos and the Relations between Egypt and Canaan in Predynastic Times. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 437-449. London/New York, Leicester University Press.

Holthoer, R. 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery.* The Scandinavian Joint Expedition to Sudanese Nubia.

Ilan, O. 2002 Egyptian Pottery from Small Tel Malhata and the Interrelations between the Egyptian 'Colony' in Southwest Palestine and the 'Canaanite' Arad Basin and Central Highlands. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 306-322. London/New York, Leicester University Press.

Ilan, O. and Y. Goren 2003 The Egyptianized Pottery Vessels of Early Bronze Age Megiddo. *Tel Aviv* 30 (1): 42-53.

Kansa, E. and T. E. Levy 2002 Ceramics, Identity, and the Role of the State: The View from Nahal Tillah. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 190-212. London/New York, Leicester University Press.

Kempinski, A. 1992 Reflections on the Role of the Egyptians in the Sheferah of Palestine - in the Light of Recent Soundings at Tel Erani. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th-3rd Millennium B.C.*, 419-426. Tel Aviv.

Kempinski, A. and I. Gilead 1991 New Excavations at Tel Erani: A Preliminary Report of the 1985-1988 Seasons. *Tel Aviv* 18 (2): 164-191.

Levy, T.E., D. A. Alon, P. Smith., Y. Yekutieli, Y. Rowan, P. Goldberg, N. Porat, E. C. M. van den Brink, A.J. Witten, J. Golden, C. Grigson, E. Kansa, L. Dawson, A. Holl, J. Moreno and M. Kersel 1997 Egyptian-Canaanite Interaction at Nahal Tillah, Israel (ca. 4500-3000 B.C.E.): An Interim Report on the 1994-1995 Excavations. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 307: 1-51.

Levy, T. E., D. Alon, E. C. M. van den Brink, E. Kansa and Y. Yekutieli 2001 The Protodynastic/Dynasty 1 Egyptian Presence in Southern Canaan: A Preliminary Report on the 1994 Excavations at Nahal Tillah, Israel. In S. R. Wolff (ed.), *Studies in the Archaeology of Israel and Neighboring Lands in Memory of Douglas L. Esse*, 411-445. Chicago and Atlanta, Studies in Ancient Oriental Civilization/ASOR Book Series.

Levy, T. E. and E. C. M. van den Brink 2002 Interaction Models, Egypt and the Levantine Periphery. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE, 3-38. London/New York, Leicester University Press.

MacDonald, E. 1932 *Beth-Peret II: Prehistoric Fara.* London, British School of Archaeology in Egypt.

Mazar, A. and P. de Miroschedji 1996 Hartuv, An Aspect of the Early Bronze I Culture in Southern Israel. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 302: 1-40.

Miroschedji, P. de 1998 Les Égyptiens au Sinaï du nord et en Palestine au

Bronze ancien. In D. Valbelle and C. Bonnet (eds.), *Le Sinaï durant l'antiquité et le Moyen-Äge: 4000 ans d'histoire pour un désert*, 20-32. Paris, Éditions Errance.

Miroschedji, P. 2002 The Social-political Dynamics of Egyptian-Canaanite Interaction in the Early Bronze Age. In E. C. M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 39-57. London/New York. Leicester University Press.

Miroschedji, P. de (ed.) 1989 *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien.* Oxford, BAR International Series 527 (i) (ii).

Miroschedji, P. de, M. Sadeq, D. Falting, V. Boulez, L. Naggiar-Moliner, N. Sykes and M. Tengberg 2001 Les Fouilles de Tell es-Sakan (Gaza): Nouvelles Données sur Les Contacts Égypto-Cananéens aux IVe-IIIe Millénaires. *Paléorient* 27 (2): 75-104.

Oren, E. D. 1973 The Overland Route Between Egypt and Canaan in the Early Bronze Age (Preliminary Report). *Israel Exploration Journal* 23: 198-205.

Oren, E. D. 1989 Early Bronze Age Settlement in Northern Sinai: A Model for Egypto-Canaanite Interconnections. In P. de Miroschedji (ed), *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien*, 389-405. Oxford, BAR International Series 527 (ii).

Oren, E. and Y. Yekutieli 1992 Taur Ikhbeineh: Earliest Evidence for Egyptian Interconnections. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th-3rd Millennium B.C.*, 361-384. Tel Aviv.

Perez-Largacha, A. 1995 Some reflections on trade relations between Egypt and Palestine (IV-III Millennia). *Göttinger Miszellen* 145: 83-94.

Porat, N. 1986/87 Local Industry of Egyptian Pottery in Southern Palestine during the EB I Period. *Bulletin of Egyptological Seminar* 8: 109-129.

Porat, N. 1989 *Composition of Pottery: Application to the Study of the Interactions between Canaan and Egypt during the 3rd Millennium BC.* Unpublished Ph.D. thesis. Submitted to the Senate of the Hebrew University of Jerusalem.

Porat, N. 1992 An Egyptian Colony in Southern Palestine during the Late Predynastic/Early Dynastic Period. In E. C. M. van den Brink (ed.), *The Nile Delta Transition: 4th-3rd Millennium B.C.*, 433 -440. Tel Aviv.

Porat, N. 1996 Appendix B "Egyptian" Pottery from Hartuv: A Petrographic Description. In Hartuv, An Aspect of the Early Bronze I Culture in Southern Israel. In A. Mazar and P. de Miroschedji, *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 302: 34-35.

Ritter-Kaplan, H. 1991 Tel Aviv, Rishpon 4. *Excavations and Surveys in Israel* 9: 140.

Roshwalb, A. F. 1981 *Protohistory in the Wadi Ghazzeh: A Typological and Technological Study Based on the Macdonald Excavations*. Ph.D.thesis, University of London, Institute of Archaeology.

Sharvit, J., E. Galili, B. Rosen and E. C. M. van den Brink 2002 Predynastic Maritime Traffic along the Carmel Coast of Israel: A Submerged Find from North Atlit Bay. In E.C.M. van den Brink and E. Yannai (eds.), *In Quest of Ancient Settlements and Landscapes: Archaeological Studies in honour of Ram Gophna*, 159-166. Tel Aviv, Ramot Publishing, Tel Aviv University.

Stein, G. J. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia.* Tucson, The University of Arizona Press.

Tufnell, O., D. F. W. Baden-Powell, D. M. A. Bate, J. Černý, D. Diringer, M. Giles, H. Helbaek, B. S. J. Isserlin, M. A. Murray, B. Parker, E. Porada, F. C. Thompson, E. Todd and J. Waechter 1958 *Lachish IV: The Bronze Age.* London. (Text) (Plate)

van den Brink, E. C. M. 2002 An Egyptian Presence at the End of the Late Early Bronze Age I at Tel Lod, Central Coastal Plain, Israel. In E.C.M. van den Brink and T. E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the early 3rd Millennium BCE*, 286-305. London/New York, Leicester University Press.

van den Brink, E. C. M. and E. Braun 2003 Egyptian Elements and Influence on the Early Bronze Age Ⅰ of the Southern Levant - Recent Excavations, Research and Publications. *Archéo-Nil* 13: 77-91.

Ward, W. A. 1963 Egypt and the East Mediterranean from Predynastic Times to the End of the Old Kingdom. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 6: 1-57.

Ward, W. A. 1969 The Supposed Asiatic Campaign of Narmer. *Mélanges de l'Université Saint-Joseph* 45: 205-221.

Ward, W. A. 1991 Early Contacts Between Egypt, Canaan, and Sinai: Remarks on the Paper by Amnon Ben-Tor. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 281: 11-26.

Yadin, Y. 1955 The Earliest Record of Egypt's Military Penetration into Asia? *Israel Exploration Journal* 5: 1-16.

Yeivin, S. 1960 Early Contacts Between Canaan and Egypt. *Israel Exploration Journal* 10 (4): 193-203.

Yeivin, S. 1968 Additional Notes on the Early Relations between Canaan and Egypt. *Journal of Near Eastern Studies* 27 (1): 37-50.

Yekutieli, Y. and R. Gophna 1994 Excavation at an Early Bronze Age Site near Nizzanim. *Tel Aviv* 21 (2): 162-185.

ウォーラーステイン，Ⅰ.（川北稔訳）1981a『近代世界システムⅠ』岩波現代選書　岩波書店。

ウォーラーステイン，Ⅰ.（川北稔訳）1981b『近代世界システムⅡ』岩波現代選書　岩波書店。

山藤正敏　2006「前期青銅器時代Ⅰ-Ⅱ期におけるエジプト－パレスティナ地域間関係の変遷－パレスティナ地域出土エジプト系石製品の検討から－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 51 輯　第 4 分冊　133-144 頁。

山藤 正敏
早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程
Masatoshi YAMAFUJI
Waseda University